洋学文庫
文庫8
C 269
4

泰西七金譯說卷之四

渋江軋　鑒試　馬場貞由　譯述

苦味郭(ヒキ)識(ヒル)尓(ニ)勿(ナ)耳(ミ)と是(コレ)水銀を譯(ヤク)す

苦味郭識尓勿耳銀ハ略稱して唯苦味郭とれ
云ふとあり羅甸語呼て亜尓(アル)倹(ケン)的(テキ)木吸(ヒ)々由(ユ)無と
云ひ瓦里西亜語呼て倹逸(ケイイツ)沓剌(タラ)尓(ニ)掘逸(クイツ)留(リウ)木と云
ふ又其質活流して安靜なるを好きゝ因て往古

41- 7667

し製煉家あれを脈ボルと名久留リ斯（按ずるに太古の人名なり此人の行状より因て名ずけしものなるべし）と名けゝるこれ〻濕氣あれども其濕氣手をめぐりすれば至らざる地以て亜郭亜西加（按ずるに乾水の義）とも名けゝるなり

水銀ハ活流して鎔化したる錫を見るゝ如く白色ふして光澤あり重きを黄金より亜く然りといへども赤色火中より投ずるときハ火勢より勝つを能はず皆飛散ずるなり一説にハ水銀地「メタール」の部位より屬せずして「ハルフ。メタール」（按ずるに「ハルフ」ハ半の義にして五金の外にして亜鉛等の如き金の總名）乃類に加ふと云ふこれ其質流動をあきもれざるに因てなり斯の如く異説ありて一定せず今思ふに水銀ハ全く諸金とハ別種異性のものとせゝ即其性質左に録

性質

一「ル」（按ずるに金銀銅錢の惣名）の部に加へ又一説にはこれを「メタール」の部位に屬せずして「ハルフ。メタール」（按ずるに「ハルフ」ハ半の義にして五金の外にして亜鉛等の如き金の總名）乃類に加ふと云ふこれ其質流動をあきもれざるに因てなり斯の如く異説ありて一定せず今思ふに水銀ハ全く諸金とハ別種異性のものとせゝ即其性質左に録

性質

第一　其質鎔化したる銀或ハ錫ニ等しく故ニこ
れニ苦味郭識尔勿耳（按ニ生銀又ハ活銀の義）の名あり
第二　水銀の面ハ毎ニ凸形を形ち又其近動き
ること水ニ等しく然りといへども手指ニ付めるすこ
ぶるこれ所謂亜郭亜西加（乾）と命名せし所以也
第三　火ニ投ずるときハ甚さ速ニ化して煙と
なりて飛散ち此化したる煙ハ即皆細粒ニ付なし
たる水銀なり故ニ此煙ニ付湿したる皮革の類を
以て受くるときハ皆これニ附著ち嘗て古人ハ
ち神人「メルキユリス」の名ニ付命せしハ甚さられ
の速ニ流動して暫くも安静せさるを故なり
第四　黄金ニ次てハ水銀の如く重き金なるし即
諸金ニ付水銀中ニ投ずるときハ皆其上ニ浮む猶
ほ黄金のミ沈底ち
第五　流動ち為き諸液汁の中ニ於て水銀の如
き冷なるハなし又此ニ付火ニ炙ちて内ニ火気を

含ミ留ることハ最も他の諸液汁より久しく然れとも
水銀ハ水の沸へる程の火候よりハ皆飛散せ
ふなり
第六　水銀ハ香もなく味もなし
第七　水銀ハ諸金を解化せしむる功あり又よ
く諸金と和せられと混和せらるる故名て「アマル
ガマ」と云ふ銀錫鉛とハよく和するといへとも最
もよく黄金と混和せ銅とハ容易ニ和せす又銀

とハ少も和せすとなり「ビスミュット」按ニ一説ニ
「リ」と譯せと云ふ追考をへし　とハよく和せ其「ビスミュット」と相
和したるハ即「アマルガマ」按ニ金をさくさくる様ニ解化したる故
なの状ニ成る此「アマルガマ」状なしらふもの
と別ニ鉛を和したる水銀ハ成相混せるとも紀せ
最も淡薄ニなりて殆んと唯鉛のミ成化したる
水銀を皮袋用て漉したる物の如くなるなり
第八　水銀ハ丹礬の酸汁硝石の気ある酸汁海

鹽の酸汁酢及草木より取りたる酸汁等を以て
よく解化せ〻〻
第九　最もよく硫黄と和きられと和したる
火勢に借て升遐せふと紅ハ赤色の物とする
ことを成銀硃と名く
第十　水銀と硫黄とを混和し相磨きるときは
自ら黒色の粉末と成る此末を「ヒチヲビスミ
子ラリ」と云ふ製法尚後に詳に記せ〻〻

第十一　水銀ハ冬夏寒暖の時候に因て其分量
を異にす即揑烏滿名君玻璃器一杯の水銀ハ夏
月に量りしに其重さ八十八錢一分一厘二毛ゆ
ゑこれを又冬月に量るに八十八錢五分一厘二
毛ありしとか
　負曲按に其冬夏分量ハ異なる所以ハ全く空
氣の厚薄粗密に因てなり天元計儀譯説中に
略此理を載せたり

第十二　精潔なるたる水銀のよく其水気を
除きうる玻璃瓶に入れ是を暗昧の室中にて
動揺するときハ自ら「エレキラル」の光に等し
き光を顕す

第十三　水銀ハ引き延ハすべらす然れども甚
さらに無量数の細粒に分離を可し

第十四　水銀ハ礬石の気を帯ひうる「サリニス」
と云ふ一種土氣（註曰「ベッカ」此人ハ此土ヲ「デ
ヤ」と名ケリ食鹽の酸汁

中にも同じく水気と帯ひうると至極微密に混和しうる水銀の
重量なる所即皆られる為めなりとて水銀の
本質とハ術を以て分離をへし「リッピルマトラ」
或ハ「ペルレピダーテン」等の如き水銀製の諸茶
品皆至極の細粒に化しうるといへとも顕微鏡
を用ひて観ると紀ハ光澤ありて活動をなき小粒
の生銀尚其中に存したり乃指頭にて斯の如き
水銀製の茶品を揉み合ふときハ小粒の水銀

相聚りて一滴の生水銀となるを生肉眼にて見る〳〵実に水銀ハ天地間に生ずる萬物の中に於て一種奇異の性質なるものあり人智の窮理す可らざるものあり

千七百五十九年我宝暦己卯九の末より翌千七百六十年我宝暦庚辰十の初めに至るまで伯多録勃尓孤（ペテルブルグ）

魯西亜都府に大寒あり此時種々発明せしこと多し即水銀の大寒にあゝとき凍りて塊凝ずるを始て知まりられに因て後其理を窮め白雪を取てこれに硝石の精気を加へ其中に寒暖測量儀を漬くるに管中の水銀凍りて自ら塊凝せしとなり而後に此塊凝したるを取て秤量せしに其活動ずる時よりハ甚だ重く且鉛の如くに撓む

色く又槌を以て打延ハそゝと云ふ但し右の白雪の代りに氷砕き用てハ然くなるにとゝ

今時に至るまても魯西亜国の外ハ未だ歐羅巴
の諸列に於てこれを実試したる者なし若し人
詳に此魯西亜国に於て試み発明せしことを知り
得んと欲せハ千七百六十年（我宝暦十年）九月魯西亜
因女帝即位の日「ブラニ」人名伯多録勃尓孤の学
校に於て編集せし水銀塊凝並以術催寒気法と
云ふ一篇ありこれを求めて見るへし詳に載せ
たり我和蘭国に於ても「ホウトトイニ」人名と云ふ
者ありこれを抄譯したるものあるなり
諸窮理家皆水銀ハ自ら空気を含みたりと云
へともこれハ誤考謬說なり即「ロ井ル」人名君曰
水銀中にハ空気を含みたりと云ふ其空気ハ空
気に同じすこれ水気なり此水氣ハ水銀に火上
に発るときハ自ら飛散を然れとも火を下し
ホ空気に中ると忽ち其水気来復をなすなり
と「ボルリニ」人名曰琢磨したる鎖（按に何にて造りたる）

詳なら寸ば暫く水銀中に漬け置きしに悉く錆を生せしと又製煉家の祖「ライモントゥルリウス」人名曰水銀には水気を帯ひたるありとあり思ふに水銀の人體に入る吐逆せしめ又神経に徹着して害をなすは全く此水気の所為ならん乎此水気を除き去りて用ひるは其功必す大なるへし或製煉家曰水銀の人體に入る害ならすは水銀中に存する「子イムピ」と名くる礬石の氣を帯ひたる土気の所為なる可し此土気は山鹽（ミネラルソウト）を加へてよく攪白し而してあまを水にて洗ひ灌くときは其土気水に附て去り且甚き精潔純粋なる即ちまを活汞と名く最も茅用及ひ黄金製用に良しと称り（自註に曰以上皆実試の説なり学者尚此上を鑒ミ開くへしと）猶逸都国なる製煉術の三大家「ベッケル」「スタル」及ひ「ベンケル」以上皆名曰水銀は礬石の気を帯ふるにあらす活流なる礬石なりと云て可ありと

他の諸金の如く水銀も亦山中より堀て出すも
のなり然きともこれを出す山ハ甚さ世に希き
なり即今歐羅巴洲中僅五六国あり翁瓦里亜齊
西利亜波阪米亜伊斯巴泥亜及ひ「カリンチン」等
の中に産をふれとも尤も近頃拂郎察国の中「ノル
マンディ」に水銀坑を見出せり然きとも此国に
て八専ら東西印度支那日本「ホトル」等の産と用
ひる外り此諸国ハ皆これを金坑より堀り出す

羅瑪の属国に水銀を産する所あり又伊斯巴泥亜
の属国にもこれを産する所あり總て我地方通用
する所のものハ齊西利亜及ひ翁瓦里亜の産か
也又ふく「プリヲウル」の産とも用ひ或白此「プリ
ヲウル」の地にハ甚さ多く水銀を産する即三年の
間に堀て出せし所六十九萬五千三百三十四觔
ありしとなり總て帝国（按に羅瑪国なるか）に産する水
銀ハ皆これを和蘭人買ひ集めて製精し諸邦に

致して交易の貨物となし猶遠都人ハ皆我邦より
りこまを買ひ求めて用ゆるなり
水銀を運送するにハ皆人羊の皮袋に納め又ハ
まこを桶に入れて其間隙の所にハ糠を充めれと
をれらりハ水銀中に硫黄を交和し銀朱の如
くふに以て運送をふを大に辨利なり勿論其交
和したるハ容易に分離をへし
水銀鑛に二種あり第一ハ水銀と硫黄と混和し

赤色にして銀朱を見るに等し幾物られなり（以下暫くかれに銀朱鑛と譯す）第二ハ塊凝して状石に似質少く
軟なり（以下ここに軟石鑛と譯す）蓋し鑛石の類に因て製法
も亦異にす即左に記す
第一　銀朱鑛を製法するには先つ細末に搗き
かれに石灰錢粉古鐵或ハ鱸蓬鹽葡萄酒石等の
粉末の如きにく硫黄と集寄せる功ある物を加
へて陶器に入れ厚く延へる「ブリッキ」（金名）の板に

数小孔を穿ちこれを蓋となしこれ又他
の陶器中に上下轉倒して入れ而して炭火中に
納め四方より火をうけ焼くべし然るときは其
硫黄八鉄鹽等の粉末と自ら和して一體となり
水銀八底の小孔（按に右の「ブリキ」造りたる蓋なり）より外器
中に漏流し入るあり此を取て貯ふ可し
第二　硫気ある帯びさる軟石鑛あれハ細末に搗
きて「レトル」に入れ其口の所に器に水半分ば

入れたるばをけ置き而して蒸煆するより水銀
ハ自ら其をけ置きたる器中に流れ入る
時としてハ坑内より活流する純精の水銀を掘
り出すもあり是ば「マーグデク井ツキ」と名く其
純粹精潔なるを法を以て製しさる物といへと
も遥に下る
純精金品の水銀ハ皆白色光澤ありてよく延流
するを清水の如し又下品の水銀ハ銅器に入る

きハ渋色よして鉛の如く又指を入れてたれを
撹匂さきハ細粒其指ふ着く此等ハ皆不潔よし
て錫鉛の混和したるふるのすり
水銀の性質実素のことに於てハ未さ的実の考窮
無説なしこれ此よ礬石の毒氣を帯ひられハ散
て実試さるを以皆人恐るきハなり「ベッケル」「バギ
リニュス」「サントウ井ク」「バンヘルモント」以上皆人名等
の説よハ水銀ハ煆化を可らさる一種の硫黄の

金石の気以帯ひられ物なりと云ふられ最も妄
説あり取るよ足らす嘗て考窮して金銀の実素
ハ水銀なるを以発明し既よ金銀より水銀を分
離し取ると又其分離したるを再ひ合和さるを迫
ハ窮理し得られれよ就て製煉家又思ひ労し
水銀を以塊凝せしめて金銀を製造せんとせしか
其功空しく一として成らさりき都て水銀ハ猛
火よ上されハ忽ち風化して更よ取り留むへの

らさるものなり

水銀ハ皆礬石と土気とハ離るゝことなし然ときとも其中ニ含有せる所の金ニハ各異同ありこれを試ミ質さんと欲せハ銀造のヒニ水銀を入きこれを猛火ニ上せ蒸散せしめ其蒸発する煙色を見て知る可し即

黄色及緑色煙者　為含金

青色煙者　為含銀

紫黒色及紅色煙者　為含銅

白色煙及礬石色煙者　為含錫

暗白色煙者　為含鉛

濃黄色煙者　為含鐵

水銀ハ水の如くニ流れ迸るといへとも質燥き且無量数の細粒ニ分離をへく最もよく活動を又これニ甚しき互相求力あり如何と為ハ平滑面の石盤或ハ紙上ニ水銀を載せるときハ自

〻〻分散して数小粒となり暫くも留り静まる
ことなく少しなりて其盤面より凹低の所ひきハ其所
へ流れ寄る又二滴の水銀ハ盤上へ載せられを
旋轉逆動せしむるときハ二滴相近く流き寄ふ
と雖ハ忽ち逆り相寄て自ら一體となるこれ
即水銀の甚しき互相求力の因て為る所なり水
液の類流動さへき物ハ總て其勢力ありといへ
とも甚だ微弱なり但し盤上へ載せても少しを

逆動せす其所へ留る水銀ハ必不潔なるか或ハ
偽造の物と知ふ可しさて當世の窮理家曰金石
及ひ其他実體をなす物の堅硬にして重き可以
ハ都て其合織しなる根原の微質の互相求力に
因てなり即假令ハ是きと彼れと相比し是きハ
彼れより重実堅硬なりと云ふ其堅硬重実なる
所以ハ全く其合織して體成なす其微質の互相
求力か彼きより勝れなる所為なり又其互相求

力の強弱ニ因テ物體の肌ニ粗密を生ずるなり
粗密の差ひなりして物ハ軽重を生を蓋し今天
地間ニ在る実物中氣眼のられるき程ニ密織合
成したる物あり既ニ黄金ハ諸実體物中の最も
重実なるものといへとも其肌全く密織合成し
たるにあらしに逆動をる水液尚通徹をるなり 按ニ
此證ハ第一巻金の部ニ見ル
黄金ニ次て重き物ハ水銀なりられニ因て水銀

も微質密実ニ合織したる物あらんと思ふ
なり然れども其の速走発逝して堅硬なる
る所ハ未ニ其理を辨をるを能ハすられ窮理
ならすハ必容易ならさるとなるへしられニ
他物を加へ妙法を以て製をるとれハ性状変し
少し堅くなるすなし即世ニ諸説ありといへとも
水銀ハ半金（パラダル）按ニ五金外の金の惣名なるを必定せり往古の
製煉家黄金ハ製造せし説あり予も亦其證ある

を見るまハ全くこれを虚談なりとハいへさ終
ともは是ハ古人の秘法よりて今人間々傳らす最
も容易なるさ所術なり
水銀と水と其重さ比較するに一萬三千五百
九十三と一千との如し又一日一萬四千一百
と一千との如しと尤も世界「ツピル」に製したる
を以て比するれハ八千と一千との如し乃水銀の
実素水の実素より多きこと十三四倍なるなり

水銀ハ最も微密なるその故に金銀銅真鍮
鉛錫等よりも透徹するなり又こゝに油性交和
し人體の外皮より擦るとハ其気眼より血液
中に入る故に病よりも用法に因てハ甚さ奇功
を奏するなり生水銀或ハ水銀製の某剤を服して
後口中に黄金性含むときハ體内の水銀悉く大
きに附着して黄金終にハ銀色に変ずるに因
て水銀ハよく黄金性求引し黄金性よく水銀を

求引し又よく水銀の速効ある所を知るべしと
きゝ容易に迸動する性なる物に依て少しの熱
気にて上昇せらるゝなり
一説には水銀膏薬用となしては甚だ功ありと
云ひ又一説には甚だ害ありと云ふ然れともよ
く是膏製法に心を用て内外より用ゆるときは
最も奇功あり即其功を顕す所に至ていはれは
必敵なる薬品なくこれ皆人の用ひ試て知る
ところなり
水銀坑に入て絶へを業とする者は都て皆中風
膏煩に此病を得る所以は全く水銀の酸気及ひ
其硫気に中るの所為なり又恒に強気の葡萄酒
及ひ此他總て気の強き酒を過分に用ゐる人亦
中風を煩ふられ亦酒中ある硫気に中るの所為
なり
生水銀は服して胃中に害をなすとなし即皆直

に縮腸に納る此にハ二三觔ハよく納まるなり
若し此縮腸に熱の症にあらずして唯大便不
利より生じたる病あるハ譬へ危難の症といへ
とも此生水銀を服するとハ其重さにて自の
ら大便道を押し開き留滞する便を下す故に縮
腸の病自のら治するなり而して其内服したる
水銀ハ少も腹内に残るなく始免の分量残存
して肛門より下るなり

水銀ハ諸種の虫病に用て功あり即水銀を煮て
る水を用ゆるときハ蛔虫を殺す故に大人小兒
共に此病ある者に用ゆるハ甚功あり但し此症
ハ大人にハ稀まに在り
細疱小疹搔痒疥癬等の如き皮膚の疾瘡にハ甚
き奇功あり此丸ハ適宜に製し相應して用ゆる
ときハ寒痼悪性膿瘍瘡瘡等に最も功あり（自註曰）
瘡瘡にハ数々これを用ひ試むるに
其功を顕すと他症の如くならに此他黴瘡及

ひ諸種の梅毒ゑ用ひ試るゑ実ふられ奇茉と謂
はへ〜先哲「ブールハーヘ」曰よく製浴したる水
銀ハ粘液及ひ腐液より生しふる諸症の痩削病
の年々しく治せさるを療をとられ未実試せさ
るといへとも必を其功あらんと思とるなり
水銀の用法近世漸く発明せしを多し即一種の
水銀製茉を以て吐涎せしめすゑして黴瘡梅毒
を治せるなり此他賢哲「スピトテ」氏名なる者水

銀製茉の奇功を発明せしをあり後ゑ記を
水銀ハ家具及ひ儀器等を造るにも亦其用甚さ
多し即玻璃鏡天氐計儀寒暖測器等ハ水銀ゑ
ものきとを紀ハ造る色うすす金匠等ハ水銀を得さ
れハ鍍金をるを蝕とす又朱丹等都て紅顔料も
亦水銀られなきとを紀ハ製すを蝕とを此他水
銀の要功爰ゑ舉載し盡を可らされるなり「ケイス
レル」氏名君の記行ゑ阨以迭利亜地名の地ゑ在る帝

王所領の水銀坑の記事あり左にこれを抄録を
されに次て又水銀製茅法及其用法を記し以て
好事の人の為めに示す

在阨以迭利亜水銀坑之記

阨以迭利亜ハ加尓泥悪利国中の一列にして悪
悪斯天歴逸吉の属国なり此地に高山あり羅瑪
人呼て「エルペスユリヤ」といふ此山足の所深谷
をなす此所に水銀坑あり此邊の往来甚だ難し

且一傍に深谷あり此邊の人家都て二百
七十餘戸土人九二千人あり
此地の水銀坑ハ創く千四百九十一年我明應六羊丁巳
に発見せり其頃ハ此地方都て樹木繁茂しあり
しか故に多く桶匠居住して専ら其樹木を以て
桶状造りを然るに或夜桶匠の一人桶を造り其
漏穴の有無を試みんが為めこれを此地坑通流
せる河に漬置りて而して其翌朝爰に来り其

桶を取らんとせしの桶甚だ重くして動かすべ
からざりしに因て愚俗のとなれハ若しくハた
ま魔神の所為ならんこと驚き退去し又来て竊
に其桶中を臨み見しに上ハ水ありて下ハは
光澤あるものゆゑ然るに水銀なりと
知らず即ちまた取て「ラウハク」地名に携へ行き
其地の合茶師に見せしめしが合茶師直に
請ひ求め其代に僅の酒銭を與へ尚多く携へ
来るべしといふ因て其後ハ屢これを取て右の
合茶師に與へまたハ次こと漸く世に聞へて後ハ
他邦の人多く爰に来り舘舎を建て專ら水銀を
堀り取れり尓後悪々斯天歴吉の「カアレル」人
他邦の人を禁し唯其土人をして堀り出さ
しめてこれを買ひ集めて国益の一となせり
と
此地都て森林多く今製法舘にて用ゆる所の薪

ハ皆凡これより三里許りを隔て「スコッテ」「タテ
ハウル」及「ブスセク」と云ふ三森より樵夫出し
「イダラッスサ」といふる河に浮み下りしふるものれ
も此に八甚さ魚類多し佳品の「ホレルレン」鱒あ
り其重さ六觔より十二觔まてに至るこれ水銀
の礦帯ひたる泥土中に生ずるといへとも其
味少も異なることなく皆美味なり
此河の外に尚一小流あり即製法館を距ること凡

一里此河製法館に用ゆる所の河と其間の地域
穿て水路を合せしより尤も製法館の近所に山あ
りてたゝ一の泉水ありしとも云れを夏月に至れ
ハ其水渇するが故に止むを得ず遠く隔りた
る河を穿ち其水を引てこれを用ゆるなり
嘗て「ステムソル」の君長此水銀坑首を兼ねて
此地の近傍なる古城に居住せし時に此阨以迭
利亜なる水銀坑の内外水銀の脈路洞穴出入を

る所水道又何所より何類の鑛石ありとゝまよ
ても悉く雛形より造り精しく采色してこれを帝
王に呈上せり即今よりも「ウエー子」地名なる宮庫に
納めてあるなり
此坑内に二大洞あり一ハ「ジントハルバラ」といひ
一ハ「ジントハルバラ」とゝに共に深廣にして容
易に看盡さゞるなり其深き所に至てハ洞口より
一百三十尋あり

此洞に入らんには索を以て結ひ付けたる桶に
乗り上り其索を弛め下さゞ免ても洞底に至
るべし然ども洞口狹く動もすれハ其桶洞の
兩辺に當り障り且其索紛乱すれハ甚だ危きう
故に狹き梯子斜に設けられたり下るべし若し
誤て落ると死ハ数十尋の下に至る宜く心を用
ゆべきなり
洞内の諸處にハ巡看する人の休息する所あり

又上甚〻低く腰屈せされを通行するこのゝさふ
所あり両邊ハ皆板を以て圍こゝゝ斯の如く洞
内を綿密ゝなゝたるハ唯此所の洞と「デイロル」
の中みて「スワス」なる洞とのみなり（注ハ曰此所ハワスなる）
洞内の往来する通路の所傍ハ石を以て圍こゝゝと洞内處ゝ因るハ甚さ
熱ゝて往来の人皆總身発汗するゝ至る故ゝ人
皆此所ハ悉き退去せ都て往古ハ洞内閉ちゝふ
か如く空気の往来なゝ故ゝ自かゝ火気ありて

匠人の気息を止むふゝ及へゝり然ゝも後漸く
洞を深く堀りなゝ且此彼處ゝ窓を開き門戸を
設き空気城通ゝ又其内ゝ入りたる空気ハ愈洞
底ゝ降る様ゝなゝたり
大洞の上ゝハ車ありられ洞内の水を汲こ揚る
為めに具なり洞内ゝも五尋毎ゝ車を設きゝり
洞底の溜水城汲こ揚んとするときハ諸車上下
一時ゝ轉旋するなり

尋固より実検せしを知らず又そもそも見たる人ハ
も未だ謂しなふを知らざるとも諸坑ハ都て山
神頭出をと傳へ聞り即此阨以迭利亜なる坑
よもありと乃匠人ハ毎日陶壷ハ食物を納め洞
内ハ供し又年ハ一度汎中ハ紅衣をうけ置きて
これ赤山神ハ供すと然れとも今ハこれを廃せ
ちよし此山神の形ハ小ハして老人の如く髪多
く髭を垂たるハ近世坑内の諸所ハ於て恰も貴

神の如くこれを安置す尊敬し又毎歳祭禮を供
奉するハ因て今時ハ絶へて出顕せず然るとも
高匠人の坑内ハ入り槌以て礦石を穿ち取ら
んとするときハ時として此山神も同く槌の者
をなすとゆり匠人毎ハ此音を聞くときハ忽ち
其業を廃して槌を捨て恐れ慎むと知り若し然
らずして其音をなす所以聞き索め行んとせ
ば或ハ其業を止むることなきとハ後必禍なな

すといふ

天然純精水銀といふは礦石を打碎くとき自然
に小粒をなして流れ出る水銀にして製精しなほ
物の如くなれ時として「ヒッテ」と名くる一種の
白土中より出るを在り又岩石の間より牛の乳
房より乳汁の流れ出るが如くして自ら滴流を
るとあり斯の如きは逢へば一人にして一日に
凡三十六觔餘を集め得べしと此類は皆空気を

含またるを少く又穢汚の物混交したるをなき
ゆへ故に製煉術用及び天気計儀等を造るに用て
甚だ良し乃尋常の水銀よりは其價甚だ貴し但
し尋常の水銀を破璃瓶に入れ其口を密封して
まづ風車の羽に結び付けられて一晝夜の間其
風車と共に絶へず轉動せしむるときは瓶中の
水銀中に黒色の粉末生じたり此を洗ひ灌き其
粉末を除くときは其水銀最も純精佳品のもの

とあるこれ数試むるに所発なり
暗昧の處に於て天気計侵を動揺するときハ自
ら光輝を発する天然純精水銀を以て製したる
ハ其光輝甚数其光輝を試むるに水銀の動揺し
て上昇するときハ其降下するときの光輝
甚し此なり此光輝を発する起因如考ふるに其
水銀の因て発する所にあらず全く管中なる微
密の気の因て然らしむる所なり故に水銀なし

といへともよく光如発をへ〻是「リュクトポムプ」
按に空気を吸引をへしく又呼発をすき器物の名なり如見て知るなり都て
微密の空気中にハ光如発をふるのあり即二箇
の玻璃器を火上に炙て其中の空気を脱去し
其口と口と如合せよく閉塞しこれを暗昧の處
に於て焼酎に浸したる綿布或ハ皮或ハ指頭
如以て磨きふると此ハ其玻璃器より明光迸発を
ふるり此を見て其光輝を発する理を會得する

斯の如く微密の空気激動するときハ光を発するの故ニ玻璃及ひ金剛石等の平滑ニ磨琢したるを二つ合せ相磨きそふも自ら光輝を発さゝき嘗て冬月大寒の夜平滑ニ磨琢したる錢ヒを以て鎔発たる牛酪を暗昧處ニ於て壷ヨリヒヒ取ふときハ光輝ハ発せしをゆゑ明ら

ゝきハ明発せしなり又玻璃上ニ水銀を落しても光を放つ其光鏡面ニ落とそゝりハ常の玻璃上ニ落そゝの最も鮮明なり但し此玻璃面の精滑なる程其光強く粗荒なる程其光淡し天然純精水銀ニ黄金を入きられをヽ火ニ炙るときハ水銀悉く其黄金ハ吸ひ取て和せしむられ尋常の水銀を以てハ然らさるなり他邦の人阮以迭利亜の城内ニ来れハこゝきニ天然純精水銀ハ少しく皮袋ニ入れて與ふられ帝王の許免ニ因てもる所

なり

「ミ子ラ。シンナバリス」と名くる礦石ハ皆火ヨ免
ヲ火勢を假りて其水銀を取ふなり此石ハ重き
程水銀多し故ヨ貴しと雖又其色ハ真紅なるに
少しく青色帯ひ鍊ヨ中て磨きるとき紅色
「城顕をものを佳品とす此地ヨハ夥しく水銀を
含ミうる礦石多し即一箇の礦石の三分の二ヨ
り多く水銀と含有したるあり此他天然純精水

銀及ひ「ヒッテン」猶ヨ詳ヲ以て得る所の利益莫大
なり然ども思ひ程格別の利ハなしとい
「シンナバリス。ナロ色」と名くるものハ美紅色の
粒状なし鑛石の面ヨ附着したる自然生の朱砂
なりられを取て磨きれハ美紅色を顕を茉用と
なして甚功あり此類ハこの阨以迭利亜ヨハ柿
ヨ産を多く翁尾利亜の坑中ヨ出り其價甚ミ貴
く

常用の朱ハ水銀ヨ硫黄を加へ假升したるものなり水銀と硫黄とハ遠ヨ其色ヲ異ヨきとも此二品ヲ合せ假升をれハ朱となるこれ豈奇ならさらんや

此地ヨて天然純精水銀と「レッテン」と称製法をるヨ其場所を別つさて其純精水銀を製をるヨハ先つ其流出をる水銀を最初ヨ除き取り而して其餘分の礦石ヲ槌ヨて細く打砕き臼ヨ入れ細末ヨ搗きこれを洗ひ灌くなり又こうき称製をるヨ上中下と三種ヨ分つ其流き浮む所の上品なるハ其儘ヲ去除き去り貯へ其餘分ハ又搗きまして其混和したる土塊雑石を捨て而して水銀を取る但し其捨て去る所の土塊雑石中ヨ尚水銀を含ミ多ありきハ土地の小児等相集て拾ひ百勉ハ「ユルテ」(金貨の名)称以て官司ヨ賣る故ヨ小児ようといへとも此土人ハ日々ヨ利を

得るなり

往古ハ斯の如く礦石を洗ひ灌くときに少しく水銀を含有したるハ皆洗ひ捨てり然る後近世ハ甚さたまふ心を用ゆるを移り而して旦帝王より金貨と與へて往古礦石を洗ひ捨てたる舊廃の地を探索せしめ昔時捨てたる礦石の尚水銀を含有するふ物を拾ひ集めしむるなり蓋し此礦石の屑を拾ふ其善悪最もよく雨中ハ知ふ

亟し水銀を含みたるハ重きを故ふ動うさしてて留まれり其水銀を含まざるハ軽きを故ふ自うら動き流るなりられを見て擇み取るとなり即今此舊廃の礦屑を拾ひ集め庫ふ納めたる所七百「サアム」自註一日此一「サアム」分量の名ふして九百「ルブル」をいふハ都て礦石を洗ひ且つられを鎔化するハ皆「シントヨルセ」の地より「シントマルゲン」の地までに於てすらを洗の鎔化するふ間ハ洞を穿ち礦を堀

れを止む然れども此れを廃業せる間に於ては新
に洞を探索し或は洞内の柄を修復せしめ置く
なり而して或は雨天にして此業を為すを能はず
さるか或は冬月厳寒にて此業を止むると雖も
其匠人数百人を此洞内に入れて穿ち堀らしむ
るなり

淘金戸(カヂキリ)は總て給金食料を得るを他より多し然
れども皆水銀の毒気神経に侵染して手足及頭
の戦帯掣引(按に搐搦と云)顫慄を天然純精水銀の有る
坑内にて常に業をなす者は必皆此病を得るな
り故に十四日経ては坑内の匠人と坑外の匠人
と交代せしむるなり
匠人に依ては最も多く水銀の自然に染侵せし
者あり即坎の如きは石風呂に入れ下の焼き
る石に水を注くときは其湯気に因て発汗を発
汗するときに至れば其毛孔より純精の水銀流

出さふ者あり鍍金を業とする者もこれに心ゑ
用ひされハ然り（註に曰都て鍍金にハ皆水銀を用ゆきハ故に）鍍
金ハ都て空気の往来する所に於てをへし格別
其気を受くふなし又加温祭亜にて鏡を製する
者ハ皆中風の病を得るこれ亦水銀の毒に中る
故なり但し梅毒の病ある者ハ水銀坑に入て業
ゑなすときハ反て疾毒散し其病平愈をふことあ
ふなり阿以迭利亜の坑内に食物求めんが為免

時として鼠出ふとあり匠人等皆これに変餅の
層を與ふ然るとも其鼠久しく居ることなし思に
これ亦匠人の得ること如き病ゑ受て早く死を
ふと見なし都て坑内に入る人ハ甚だ用心をへき
ことなり就中空心のときなどに入ることなれ入ら
んと欲せハ先づ十分に食物調ふ毒気ゑ受
ゑを少しくさ
人に因て最も多く水銀の気ゑ受ゑたる者あり

其人の口中より釣錢状含まし或ハ其人の
指頭よりこれを磨さしむるに釣錢忽ち白色よ
りて殆んと水銀を磨り着けたる物の如し蓋
し水銀の力斯の如く微密にして透徹するとに
於てハ敢て奇とすれよ足らす如何とかれハ試
よ「コリヤンデル」草子の太さなる水銀状指頭を
以て押し弘めしに分離して細粒と成りし其数
凡二千七百萬粒各顕微鏡を以て明らよ見るへ
きなり

匠人ハ皆三月中旬より十一月迄ハ陰室よ於て
堀り出したる鑛石を焼き水銀を取るとなる専ら
とす而して其餘月ハ皆坑内よ入て礦石を堀り
出すなり

毎日焼く所の鑛石凡三十五「セント子ル」按よ分量の名
一「セント子」ハ凡我三匁よ當る これより得る所の水銀凡十五
「セント子」なり下品の水銀一「セント子ル」ハ價

百五十「ギュルデン」を以て賣る又零賣ヨハ一觔ニ
「ギュルデン」位にて其匠人の多きと此ハ凡一箇年
中ヨ得る所下品なるハ二千六百「セント子ル」量分
の名前は詳なり純精なる百「セント子ル」あり其利益思
ふ通し但しこれを為めに一箇年の諸雜費ハ六
千「ギュルテン」なりと
鑛石を焼く陰室成設けたる所ハ市街より距ること
凡八町餘これを焼くとき此ハ其臭気堪ゆ〳〵
を乃此近傍及び此隣鄉ヨ生ずる野菜果実禽獸
等皆食ふ〳〵ものすと又此陰室の近傍なる牛ハ皆
形小ヨして生長せざると雖とさるなり此陰室中
ヨ業を為す者ハ皆四七日毎ヨ交代せしむるな
りと
前件ヨ云ふが如く礦石ハ皆細末ヨ搗くなり此
搗きましたるものヨハ等分の石灰と加ふるな
り此成名て「セリス」と云ふ此成鋳製の「ロトル」

に納め斜に竈内に居へ其口ハ草茨以て塞き此
口の所に受器を接著せしめ而して之を茨猛火
にて焼く焼くときハ其口に込たる草ハ煆化
し礦石ハ鉛者水銀ハ其受器の中に流れ入るな
り但し其「レトルト」と受器の間少しにても間隙
小孔等ありてハ水銀飛散するに因て少
しの間隙も亦土白を以て塗り塞くへし
往古ハ焼者「レトルト」と受器の間の小孔を
塞くに手を以て塗り塞ぐ故に匠人恐まて速
にこれを塞くを得ず水銀多くこれより飛散
せり然るに今時の坑「首新」に夫茨なしこれを
塞くに火傷の恐きなり「ちんの」為め狹き綿
布に白土茨包みこれを以て其間隙の所に當て
纏ひ塞く故に空く水銀を失ふことなし尤もこれ
茨塗りたる白土中に侵深きゆえ故に後此土
を取り水を加へて泥の如くなし且水飛して其

水銀を取るなり又其年久しく用ひらる陶造の受器も終よハ搗き未し所謂「セリス」嬰り詳の中よ加へ以てこれよ傳染したる水銀を製し取るなり

「エドワルトブロウンス」ろ譯文よ曰此處即阨以迭利亜をいふ用ゆる鋳造の「ピトルト」の数一萬六千あり之数を聞く者驚ろかざるハあし実よ莫大の数なり然ども之ハ全く誤寫なり即右の「ブロウン」なる者の諳厄利亜語よて書記せし一冊あり其中よ曰「トルト」の数ハ一千六百ばかりなれも近頃漸くよ減少せ云くられを以て右の誤寫なるを知る至し古しハ毎竃中よ「トルト」ハ九十箇を容れたり然ども近頃新法を発明し竃の造法を異よして毎竃中入る所の「トルト」僅よ十二三箇なり尤も其古法を後世よ残さんの為めとて今よも古製の一竃ハ残した

至然きともかゝきハ柴棍多く費へふ故に絶て用
ゆゝとなせす
毎日竈中に火球燃きを朝てつ半より書後八時
に終る所謂鉄造の「レトル」焼者たるときハ恰
も硝子を見るゝ如く透徹きるなり火球消して
後其受器を取り出し見るときハ必き中にハ水
銀と黒色なる灰と相混してあふなりられに水
を投し水飛にて以て其水銀を取るなり水銀ハ

よく水気球好む故に水を投きハ忽ち灰と分
離き又其灰中にも尚水銀存在すふとあり存在
きふを防きハられも亦数度水飛して其水銀球
除き取るなり又其上にあ水銀残り十分に除く
色うゝされハ所謂「セリリス」の中に加へ竈中に焼
きて製し取るなり尤も「レトル」中に残る所の
澱滓ハ皆られを捨つ
淘金戸ハ都て皆酒を好むられに就て考ふるに

淘金戸の都て骨節顫慢をなすハ一つハ甚強飲を
るゝより起るなるべんと思ひらるゝなり
此地礦石ハ都て南ハ向ふ處より多く出て天然
純精水銀ハ西方ハ倚る程多く出つるなり山を
初め開発をすると紀自然ハ水銀粒をなして顕れ
出るをありられ其内ハ礦石のみる顕微とすれ
なり
伊斯巴泥亜人「ラ ヌセ」国の「アルマダ」ハ在る水銀

坑を領を此坑ハ「エスタラマデュラ」及「シルラモ
レナ」山ハ堺を「プリニウス」なる者の著書ハ曰羅
瑪人ハ朱砂を「ブウチカ」の中「エキスシサポ子ン
レレギヲ子」の地より得る甚られを貴重して悉
く国内ハ致さしめてられを製法を即毎歳ちを
より堀を出してらの都府ハ送る所の鑛石一萬
斛ありと「ヒ」「ユリユヒウス」曰羅瑪国ハ於て水銀
鑛を製法をる所ハ寺觀の「プロヲ」と「クイリニユス」

との間に地に於てもと往古ハ朱砂を顔料に用ひたり即「プリニウス」及「パウサニヤス」の著書に曰「ユピイトル」の鬼神の名の祭日に朱砂を以て「ユピイテル」の像の顔面を彩色せりと往古専ら朱砂を用ひたるとハ「ルギリウス」の著書にも見へたり又書冊の表題の大字ハ朱を以てするを「ヲヒデュス」の詩に隨ふものなり即日表題ハ朱を以て記をへし紙にハ「セードデル」樹木の名の汁を以て書をへしとあるにハなり

「デヲカスレウス」名書第四十巻に曰帝王の書翰等に記せる自身の性名ハ皆朱筆以て記せりと「ガルギュラ」帝ハ自ら奢侈極て砂石の代に戯臺上に「ケレイソネル」の山名硫布を敷り然るに「子ロ」帝ハ尚其上に奢を長してもと朱砂の粗末を布りと按に以上皆朱砂を昔時にも用ひしといふに證拠をいふ

右に引用伊斯巴泥亜人所領の坑にハ天然純精

水銀少し此外伊斯巴泥亜人ハ王国「ヘリユ」の中なる「ユアンカヘリカ」なる水銀坑も領き此土人ハ此礦石あるこトハ年久しく知ることいへとも水銀を製し取ることを知らす「キリムピ」と名て唯顔料に用ひしのみ伊斯巴泥亜人も最初ハ其用法を知らさりしか千五百六十七年我永禄十年丁卯に始て波爾杜瓦尔人より此を以て水銀坑製し取ることを伝受しなりと

伊斯巴泥亜ハ其国中及其属国にも多く水銀を産す然ともとも往古ハ自国の産悪品にして且国用に足らさりし故に駁く他邦より買ひ入れり然るに彼の亜墨利加なる領地にて堀出を所の金銀盡きたる故に水銀の用も減少せり（註日金銀を吹き分るにハ水銀を用ゆ）仍て他邦の産を買ひ入ふしも止ミたり

古ハ拂郎察国の中にてハ「ユニグステイン」の地

よて水銀を製法せり又三十年以前より「ノルマン
チーン」の中「シントロ」地名なる朱砂坑を発見せり
然るに年久しく経てして其坑中水溢きて扱ミ
乾をへうさ故より此業を廃せりと思ふより其
水を扱ミ乾を術を得られ再行せるを
能はられハ其後其侭より廃せりと見ゆ
古ハ「スペール、マルク」地名の中より水銀あり今ハ
産せず又翁尾利亜の内よも坑あり一説より曰「ヘ

スセンホムビユルグ」及「ケウルペルナス」国中「ケレ
ウツナク」より三里許り彼距り「ドンヲルスベル
グ」の傍よりて「ミユセランツベルク」の地より水銀
を産を此處ハ天然純精水銀もあり帝王ハ
ヲ取らしめ以て交易をなすと近世陀以迭利亜
の産も漸く減少し毎歳僅より一二千「ゼントヲル」
分量前より注す彼の城内より於て交易をとりこれ実説
あり

和蘭人ハ古此阨以迭利亜より水銀を買て萬国
へ運送して交易をなせり蓋し和蘭人ハ未其水
銀を受取らざる以前より其價を納めり故に坑司
甚られに利益を得る如何となれハ其價ハ水銀
と和蘭人へ渡して後に帝王へ納め水銀ハ渡さ
ざる間ハ坑司暫く其金貨ハ自由になせハなり
嘗て帝王蘭人の外へハ賣與せざるハ約せり
然るに後他邦の人へ直賣せハ其利大ならんと

思ひ其約を背て即今ハ専ら蘭人の外尚他邦の
商賈へ零賣するあり
此處へ於て賣買する水銀ハ皆皮袋へ入きたり
毎袋の重さ百五十觔この二袋を一桶へ納め四
百五十「ギルデン」金貨の名へて賣るなり夥しくこれ
ハ勿涅察亜の鏡匠へ致さ又羅瑪及「ナアプルス」
へも運送を但し水銀ハ恒へ小麥の糠ハ加へ置
く方良しとすこれら飛散し減少するを少し但

しかるに納むる袋の皮ハ綿密ゑして又帯を造
るの如き白色なる皮ハ良しとす
右件々水銀性質製法坑山等のを抜記したり故
ゑ又次ゑ水銀を以て製薬法を記をへし

泰西七金譯説巻之四水銀説上終